

中途障がいをもつ高齢者たちの「生」

A会における指導員を事例として

岡山大学大学院 杉本隆

1. 目的

咽喉頭がんの切除手術によって喉頭が摘出されると失声する。失声後のコミュニケーションには、各種の代用音声を使うが、いずれも訓練が必要である。わが国では患者会で、代用音声をマスターした患者が指導員となり、新たな患者にその習得を訓練している。

本報告は、患者会であるA会の指導員（約30人）への半構造化インタビュー調査に基づき、中途障がいをもつ高齢者たちの「生」のあり方を捉えることを目的とする。

2. 方法

アメリカのサクセスフル・エイジング研究における高齢期の適応問題についての主要理論である継続性理論は、病いや障がいのない正常老化（normal aging）の場合の理論とされる（Atchley 1989）。しかし、近年、身体的健康に基づく客観的な尺度（病気とそれによる障がいがない、など）では少数の高齢者しかサクセスフル・エイジングに該当しないにもかかわらず、多くの高齢者は自分がサクセスフルにエイジングしているとする、高齢者自身の主観的な答えとの乖離が指摘されている（Martin et al. 2015）。病いや障がいがあっても、サクセスフルであると答える高齢者がいるということである。

しかし、彼らの実際の生き方は、サクセスフルか否かを問うても見えてこないのではないだろうか。

A会の指導員は、全員が中途障がい者である。彼らは、代用音声を習得して、音声言語によるコミュニケーションを再開し、病いや障がいによって毀損された日常生活を修復しただけではなく、さらに、喉頭摘出者にしかできない指導という新たな役割を担っている。彼らの代用音声の習得と習熟、新たな患者の指導という経験の語りから、彼らの実際の「生」を捉えることによって、サクセスフル・エイジングを浮かび上がらせたい。

3. 結果と結論

失声した直後は生活、仕事、心理、人間関係などの激変が語られ、代用音声の習得や、さらに習熟の域に達するための苦労や工夫が語られた。しかし、失声をしてから相当の年数を経過して、指導員を引き受ける段階にまで至ると、逆に「安定」や「持続」が語られる。障がいのための気落ちがあるわけではなく、また障がいに負けまいという気負いがあるのでもなく、淡々とした「良き日常」とでもいえる「生」がとらえられたのである。障がいがあるだろうが、このような「生」のあり方が、彼らにサクセスフルと言わせているのではないだろうか。

本報告の結果は、病気や障がいを背負った高齢者が新たな社会参加を獲得することの意義を示すものであるが、それを可能とするものが何であるのかについては今後の課題としたい。

【文献】

- Atchley, R. C., 1989, "A Continuity Theory of Normal Aging," *The Gerontologist* 29(2): 183-190.
Martin, P., N. Kelly, B. Kahana, E. Kahana, B. J. Willcox, D. C. Willcox and L. W. Poon, 2015, "Defining Successful Aging : A Tangible or Elusive Concept ?," *The Gerontologist* 55(1) : 14-25.